

学問と倫理 —— 大学院ゼミの 11 年間

朝 香 花

0. はじめに

中村 敬先生は 1990 年度から 2001 年度のうち、研修で休講された 1997 年度を除く 11 年間に渡り、成城大学大学院の英語学（特殊）講義¹をご担当されました。最も多い時でも 6 名という小人数での授業は、一瞬たりとも集中力の途切れることがない極めて密度の濃いもので、常に反芻することによってのみ真の意味での理解が得られる知的に大変硬派でかつ刺激的な内容でした。

授業は主として英語社会学の最先端を行く研究をテキストに選び、それを半年から 1 年かけて精読していく形式で進められました²。大体 1 週間で（時には 2, 3 週間かけて）1 章分が課題となり、担当院生が課題部分のレジュメを作成した上で内容を総論と各論に分けて解説、それに対して先生や他の院生が質問や意見を述べ合うのですが、私の記憶している限りでは発表内容そのものに関して激論となることはあまりなく、むしろ話題はテキストの内容と日本の現代の英語問題との関連付けに向かうことが多かったように思います。

中村先生が 10 年余りにわたって、将来研究者そして英語教師を志す私たち院生に注意を喚起し続けていらしたことの一つに、「日本人研究者が英語社会学あるいは英語教育の研究に取り組む際には常に日本の英語問題を念頭に置くべきである」という点が挙げられます。それは、既に各国の

研究者たちが研究し尽くした感のある分野の隙間を縫うような学問をするのではなく、日本人研究者ならではのより独創性の高い研究をすべきというアドバイスであるだけでなく、むしろ、研究という作業が専門化を極めた挙句に「テクノクラートの自己満足」に陥る危険性への警告であると私は考えます。

小論では私が履修、あるいは聴講した 8 年間の大学院での中村先生の講義のうち、特に心に残った 6 冊のテキストを取り上げ、授業の内容を簡潔にお伝え致します。10 年以上前の授業内容など、昔のノートなど振り返ってみましても記憶の曖昧な部分や私の主観的な記述が混じることと思いますが、少しでも往時の授業の熱気が伝わりましたら幸いです。

1. 英語観とその形成史 R.F.Jones: *The Triumph of the English Language* (1953)

印刷術導入 (1476) から王政復古 (1660) にかけての英語に関する豊富な言説を基に、イングランド人の英語観の変遷を綴ったこの文献学的研究の大作が、1991 年に学部の中村ゼミから初めて大学院に進学した私たちが最初に取り組んだテキストでした。

16 世紀最後の四半世紀に入るまでイングランド人自身が母語に対して劣等感を抱き、古典語、ひいてはフランス語への憧憬から英語の改革——外来語からの借用の推進/制限、文法と綴り字の標準化等——を論じる言説、17 世紀に入ってからの、著者もナチズムとの関連を示唆するゲルマン至上主義の出現に伴う「最古 (= 最高) の言語」としてのゲルマン語 (= 英語) を賞賛する言説、17 世紀半ばの清教徒の時代に自然科学と経験主義哲学が発展し登場した実用主義的言語観——古い時代の科学や思想と結びついた古典語の軽視と、実用的な英語の重視——に基づき母語である英語への自

信を一層深めた言説、と読み慣れない初期近代英語を含む多量の引用文に苦勞しつつ英語観の変遷を読む中で、先生が私たち学生に強く求められたことは、英語観の変遷という一つのケーススタディから類型化をするという作業でした。例えば英語対古典語の関係を母語対優勢語と捉え、それを日本語対英語の関係として見た時に、17世紀初頭に英語による古典語の学習が一般化した時代の「古典語を理解する為にはまず母語を基礎とすべき」という言説と明治期の外国語教育政策をめぐる言説の共通点を考えることが可能でしょう。

Jones のこの網羅的言説資料に基づいたテキストは、前述のようにイングリランド人の英語観が劣等感から優越感に転換した時期を「16世紀最後の四半世紀」と明言しながら、その直接的理由らしい記述がないことも、私には1つの大きな研究課題を与えてくれました。

2. 言語帝国主義 Robert Phillipson: *Linguistic Imperialism* (1992)

マクロ経済学的観点から、搾取する Center と搾取される Periphery という Galtung³ の帝国主義理論を言語学に援用し、Center である英・米が帝国主義時代からの既得権益をポスト帝国主義時代にも引き続き維持する道具としての英語教育という構造について理論化したこのテキストが英語社会学という学問分野に与えたインパクトは非常に大きく、以降 Pennycook の *The Cultural Politics of English as an International Language*. (1994), *English and the Discourses of Colonialism*. (1998), *Critical Applied Linguistics*. (2001) の3冊、そして Holborow の *The Politics of English*. (1999) と、様々な枠組で英語帝国主義を分析する優れた論文が続げざまに出版され、授業でも早速取り上げられました。

Phillipson は英語教育が経済協力や援助などと同じように一見人道主義

的な形態を取りつつ、実際には Center 諸国に利益をもたらす非常に効率的な道具であり、英語教育が熱心に行われれば行われるほど、実は Center と Periphery の格差を広げていく「再生産」が起こっていると指摘する一方で、この理論が南北問題の解釈に役立っても、果たして日本などの非英語圏の経済大国にもあてはまるのかという点は今後の研究課題として残していますが、実際には英語力が進学や就職そして昇進の重要な目安とされ、ひいては社会的階層差を（例えば高所得者が高額の英語教育を子女に施すことによって）「再生産」している構造はまさしく Phillipson が描いた英語帝国主義システムに他なりません。

また同時に、将来英語教師として英語教育の現場に立つことを希望していたほとんどの受講者にとって、Phillipson のこの指摘が、自分が志す仕事と英語帝国主義のジレンマに今もなお思い悩む源になったことは事実ですが、これは中村先生もしばしばご自分の経験として語られてきた分裂的・宙吊りの精神状況⁴ そのものであり、圧倒的優勢言語を教える身がその言語をとりまく現実と真摯に向き合えば必ず苦しまねばならないものなのでしょう。

3. マルクス主義的言語不平等論 Marnie Holborow: *The Politics of English* (1999)

英語問題を考察分析する枠組として、マルクス主義というイデオロギーを導入したこのテキストで Holborow は、「言説」の概念で言語と社会の現実を結びつけるポストモダニスト的（後述する Pennycook が典型例）の試みを批判し、下部構造 (substructure) としての社会の現実がまず存在した上で、上部構造 (superstructure) としての言語を考えるべきであると主張しています。さらに、Phillipson に関して、「言語帝国主義」と言う用

語そのものが、真の不平等を招く実体（社会経済構造）から注意を反らしかねない、言語が世界秩序を決定するわけではないと批判を展開します。しかしながら、言語の不平等を結果として生み出すと筆者が主張する社会経済構造の不平等（＝下部構造）に関する記述が不十分な点が残念なところではあります。

Holborow や Pennycook のテキストに取り組むようになった 90 年代後半から、受講者の中に成城以外の大学（院）の出身者で英語社会学を専門とするメンバーが複数加わり、以前にも増してテキストの解釈にとどまらない広範囲にわたる分野のディスカッションが繰り広げられるようになりました。

4. 言説分析による英語支配論と新しい枠組の提唱

Alastair Pennycook: *The Cultural Politics of English as an International Language* (1994)

***English and the Discourses of Colonialism* (1998)**

***Critical Applied Linguistics* (2001)**

Pennycook の著作は 96 年から 01 年にかけて上述の 3 冊を精読しましたが、3 冊ともに共通しているのが言説の分析によるポストモダニズム的枠組です。筆者は Phillipson の言語帝国主義論が言語決定論であると批判している点で前述の Holborow と共通していますが、彼女とは対照的に、英語の支配構造は言説による支配の正当化が作り出したものであり (Pennycook 1994)、また英語の植民地主義的言説の再生産を断ち切るために必要な対抗言説は（英語と言説の結び付きが非常に強いために）まず英語で語られねばならないと主張しています (Pennycook 1998)。この点で土着の少数言語による対抗言説を唱える Phillipson との明らかな相違が見られます。

中村先生の大学院での講義で扱った事実上最後のテキストとなった *Critical Applied Linguistics* (2001) の中で、Pennycook は「批判的応用言語学 (CAL)」という新しい枠組を提唱しています。CAL は既存の応用言語学に取って代わるものではなく、倫理的、認識論的、政治的姿勢を伴った応用言語学の取り組みを意味している反枠組実践 (anti-disciplinary praxis) であり、常に議論と自省を必要としています。この「言語」と「政治学」と「知」の新しいアプローチが究極の目的としているものは、自らが新しい権威となることではなく、社会及び政治のより良い方向への変化であると筆者は強調しているのです。

5. おわりに —— 「学問」と「倫理」について

教えるとは 希望を語ること

学ぶとは 誠実を胸にきざむこと

ルイ・アラゴン「ストラスブール大学の歌」⁵より

学部最後の授業の中で、この言葉を 30 人余りの級友と共に送られた私は、まさしく中村先生が語られる「希望」の言葉をさらに深く聴くために大学院に進学したようなものでした。

けれども、例えば、英語の十分な運用能力がなければ昇進はおろか雇用そのものを危ぶまれることすら決して稀ではないビジネスマンの視点から考えれば、英語一極集中にいかにも異論を唱えようとも、それは「理想論」に過ぎず、「食べていく」ためにはやはり英語帝国主義の傘下に入らざるを得ない現実があるのもまた事実です。

それでは、なぜ、それにもかかわらず、私たちが「希望」を追い続けずにはいられないのでしょうか。

それは決して現実逃避ではなくそれを求めるのが「倫理的」だからなのです。Phillipson と Pennycook はそれぞれの著書で繰り返し ethical であることの重要性を強調し、共通して倫理を学問の枠組にとり込もうと試みしていますが、それはすなわちこれまで社会的側面を捨象して現実に英語が引き起こしている問題に目を瞑ってきた応用言語学が、科学を万能視し効率性を重視する 20 世紀的な側面を脱皮し、「倫理」を研究の基盤のひとつに据えることこそが 21 世紀には必要とされているという彼らの一致した主張なのです。

私もまた中村先生の講義を受けてきた中で「倫理」の重要性を真摯に見つめ、中村先生のまた別のお言葉をお借りして表現すると、「教えることは自分が先人から引き継いだ伝統を若い世代に伝えていくことである」が故に、先生に教えていただいた「希望を語り、その実現を目指していくことがすなわち真の意味での倫理である」ことを後輩たちに伝えていくことが少しでもできればと思うのです。⁶

使用テキスト一覧

1990 年

Illich, I. "Taught Mother Language and Vernacular Tongue." In D.P.Pattanayak. *Multilingualism and Mother-Tongue Education*. Oxford University Press, 1981.

1991 年

Jones, R.F. *The Triumph of the English Language: A Survey of Opinions Concerning the Vernacular from the Introduction of Printing to the Restoration*. Stanford University Press, 1953.

1992 年

Coulmas, Florian. "European Integration and the Idea of the National Language: Ideological Roots and Economic Consequences." In *A Language Policy for the European Community*. Mouton de gruyter, 1991.

- Swiggers, Pierre. "Ideology and the clarity of French." In John E. Joseph and Talbot J. Taylor. *Ideologies of Language*. Routledge, 1990.
- Mannheim, Bruce. "Language and Colonialism.." In *The Language of Inka since the European Invasion*. Austin: University of Texas Press, 1991.
- Eagleton, Terry. "What is Ideology?" In *Ideology*. Verso, 1991.
- Flaitz, Jeffra. *The Ideology of English: French Perceptions of English as a World Language*. Mouton de Gruyter, 1988.
- 1993 年
- Bailey, Richard W. *Images of English: A Cultural History of the Language*. Cambridge University Press, 1992.
- 1994 年
- Claiborne, Robert. *Our Marvelous Native Tongue: The Life and Times of the English Language*. New York: Times Books, 1983.
- 1995 年
- Phillipson, Robert. *Linguistic Imperialism*. Oxford University Press, 1992
- 1996 年
- Pennycook, Alastair. *The Cultural Politics of English as an International Language*. Longman, 1994.
- 1998 年
- Crowley, Tony. *The Politics of Discourse: The Standard Language Question in British Cultural Debates*. Macmillan Education Ltd., 1989.
- 1999 年
- Romaine, Suzanne. "Introduction." In *The Cambridge History of the English Language 1776-1997. Vol.4*, 1998.
- Conrad, Andrew W. "The International Role of English: The State of the Discussion." In Joshua A. Fishman, Andrew W. Conrad and Alma Rubal-Lopez, eds. *Post-Imperial English: Status Change in Former British and American Colonies, 1940-1990*. Mouton de Gruyter, 1996
- Alegio, John. "Americanisms, Briticisms, and the Standard: An Essay at Definition." In J. B. Trahern, ed. *Standardizing English*. University of Tennessee Press, 1989.
- Rubal-Lopez, Alma. "The ongoing spread of English: A comparative analysis of

- former Anglo-American Colonies with non-colonies” In Joshua A. Fishman, Andrew W. Conrad and Alma Rubal-Lopez, eds. *Post-Imperial English: Status Change in Former British and American Colonies, 1940-1990*. Mouton de Gruyter, 1996
- Lockard, Joe. “Bad Reviews: English and the Discourses of Colonialism Alastair Pennycook” In *Bad Subjects: Political Education for Everyday Life*. Tuesday, June 8 1999, 11:24 PM. <http://eserver.org/bs/reviews/1999-6-8-11.24PM.html>
- Kachru, Braj B. “Past Imperfect: The Other Side of English in Asia.” Paper presented at the Second International Association of World Englishes (IAWE) Conference, Nagoya, Japan, May 25-27, 1995.
- Phillipson, Robert. “English Language Spread Policy.” In *International Journal of the Sociology of Language*. 107, 1994.
- Honey, John. *Language is Power: The Story of Standard English and its Enemies*. Faber and faber, 1997.
- 2000 年
- Bex, Tony and Watts, Richard J. eds. *Standard English: The Widening Debate*. Routledge, 1999.
- Pennycook, Alastair. *English and the Discourses of Colonialism*. Routledge, 1998.
- 2001 年
- 小森 陽一『ポストコロニアル』岩波書店 2001 年
- Singh, Rajendra. “Introduction by the Series Editor.” In *The Native Speaker: Multilingual Perspectives*. Sage Publications, 1998.
- Holborow, Marnie. *The Politics of English*. Sage Publications, 1999.
- Pennycook, Alastair. *Critical Applied Linguistics: a Critical Introduction*. Lawrence Erlbaum Associates Publishers, 2001.
- Conrad, Andrew W. “The International Role of English: The State of the Discussion.” In Joshua A. Fishman, Andrew W. Conrad and Alma Rubal-Lopez, eds. *Post-Imperial English: Status Change in Former British and American Colonies, 1940-1990*. Mouton de Gruyter, 1996

注

- 1 前期課程は「英語学講義」、後期課程は「英語学特殊講義」と名称は違うが開講は同時。
- 2 授業で使用したテキストの一覧を最後に載せておきましたが、一部漏れ等の可能性もございます。ご了承下さい。
- 3 Phillipson (1992) 51 ページ参照。
- 4 一例として大修館書店『英語教育』2001年4月号の中村先生の連載を参照。
- 5 ルイ・アラゴン 大島博光訳『フランスの起床ラッパ』新日本文庫 106 ページ。
- 6 中村先生は英語一極集中状況に対して我々がとり得る手段として「言語の一元化（英語化）が生み出す…社会的不正を是正する為に「英語問題」に真正面から立ち向かう」「対抗理論」と、「英語問題を真正面から批判するのではなく別の回路で英語の力（権力）を相対化し無力化あるいは削ぐゲリラ的方法」である「空洞化理論」を挙げておられます。詳細は中村敬「言語・ネーション・グローバリゼーション—英語社会学の立場から」日本記号学会編『ナショナリズム／グローバリゼーション』東海大学出版会、1999をご参照下さい。